2017 年 8 月 10 日
株式会社ベネッセスタイルケア
ベネッセ シニア・介護研究所

～第 18 回 日本認知症ケア学会大会での発表について～

ベネッセ シニア・介護研究所
「外国人介護人材」と「認知症ケア」をテーマとしたご報告

株式会社ベネッセスタイルケアの社内シンクタンクであるベネッセ シニア・介護研究所は、5 月 26 日、27 日に開催された第 18 回認知症ケア学会大会において、現在研究中の 2 つのテーマについて発表いたしました。

発表の概要は以下の通りです。

●外国人介護人材に関する研究の動向と今後の研究課題についての一考察（ポスター）
●有料老人ホーム職員の認知症ケアについての意識（口頭）

発表内容の詳細は次ページ以降をご確認ください。

※上記以外にも、弊社ホームより 7 件の発表を行っております。

・メディカル・リハビリホームまどか川口 ※平成 29 年度石﨑賞受賞演題
「ターミナルケアを見越した入居から本人らしい時間の実現に向けた可能性への追求」
・まどか川口芝 ※リビング・オブ・ザ・イヤー2016 大賞受賞ホーム
「特定施設における環境アセスメントの早期導入についての考察」
・まどか南与野
「特定施設における入居者会議が実現させた施設介護における自立支援」
・リハビリホームまどか戸田・メディカル・リハビリホームまどか大宮
「機能訓練指導員との連携で取り組んだ役割活動の充実と自然な排便への取り組み」
・メディカルホームくらら三鷹
「特定施設における向精神薬の減薬の取り組み」
・グランダ武蔵小金井
「自分らしい生活を取り戻す為の支援」
・メディカル・リハビリホームくらら武蔵境
「特定施設は『第二の自宅』になれるのか？」

本内容に関するお問い合わせ
ベネッセ シニア・介護研究所 福田・林
03-6836-1075

外国人介護人材に関する研究の動向と今後の研究課題についての一考察
～文献レビューによる分析～

林 奈実（ベネッセ シニア・介護研究所）

1．研究の背景

これまでの外国人介護人材受入れ

- 就労可能な在留資格者（永住者、日本人の配偶者など）
- 留学生のアルバイト（週28時間を上限）
- **特定活動**
  - 法務大臣が個々の外国人について特に指定する活動

●2008年より、**経済連携協定（ＥＰＡ）に基づく外国人介護福祉士候補者**の受入れを開始

●働きながら、4年間で**介護福祉士合格**を目指す

2016年度までの受入れ人数と国家試験合格者数

国名	受入れ開始年度	受入れ人数累計	国家試験合格者 累計
インドネシア	2008	1,199	330
フィリピン	2009	1,124	176
ベトナム	2014	417	第30回より受験
合計（人）	-	2,740	506

今後の外国人介護人材の受入れ

① **在留資格「介護」**の創設（出入国管理及び難民認定法）
- 介護福祉士を持つ外国人に在留資格を付与

介護福祉士養成施設で修学（2年以上） → 介護福祉士取得・登録 → 在留資格「介護」で業務従事

② **外国人技能実習制度**への「介護」職種追加（技能実習法）
- 実習による技能移転で、開発途上国等の「人づくり」に貢献

応募 → 各国の送り出し機関（兼 職業訓練校） → 来日 日本の管理団体を通じて入国、介護施設で実習 → 毎年の技能評価試験で資格更新 ⇒3～5年で帰国

※①②共に2016年11月28日公布、1年以内に施行

今後、外国人介護人材受入れの拡大と更なる多様化が見込まれることから、調査・研究の必要性が高まってきている

2．研究目的と方法

本研究の目的

外国人介護人材に関する**研究の動向**を明らかにする → 今後の**研究課題**を考察する

研究方法

キーワード検索
「"EPA" and"介護"」
「"外国人" and "介護"」

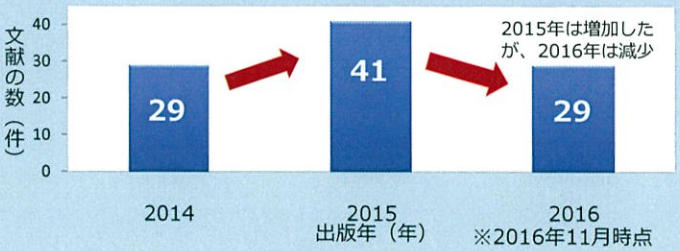
検索結果
CiNii 141件
NDL-OPAC 145件

重複等を分別
⇒ 分析対象を**99件**に絞る

研究テーマを整理（KJ法）
⇒ **14項目**を抽出

3．結果

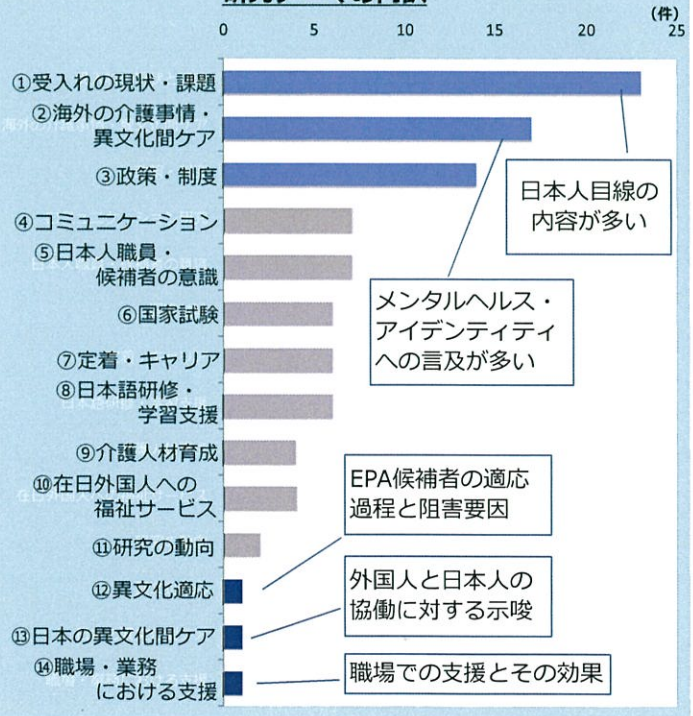
過去3年間の文献数の推移



研究手法

データの分析や質問紙調査が多く、インタビューやフィールドワーク等、直接話を聞いたり現場に入りこんだりするような手法を用いた研究が少ない

研究テーマの内訳



4．考察

受入れの現状・課題の項目を扱った調査研究が最も多く、従来多かった国家試験分析からの**研究フォーカスの変化**が伺える

動向	課題
①受入れの現状・課題は、日本人を調査対象にした、**日本人目線の現状と課題**を指摘したものが多い	**外国人の立場からの現状と課題**を帰国者の帰国理由も含めて**総合的に調査**し、今後の支援に活かす必要がある
②海外の介護事情・異文化間ケアで指摘されている、**メンタルヘルスやアイデンティティ**についての研究がほとんど行われていない	今後、受入れ対象の人材の多様化や在日期間の長期化が見込まれ、**研究が急務**である
⑫異文化適応、⑬日本の異文化間ケア、⑭職場・業務における支援の研究件数が特に少ないのは、**介護現場に継続的に入って行う調査の難しさ**が一因と考えられる	研究者が個人の裁量で行える調査・研究には限界がある。国や行政がイニシアチブを取って研究を進めることも求められる

有料老人ホーム職員の認知症ケアについての意識

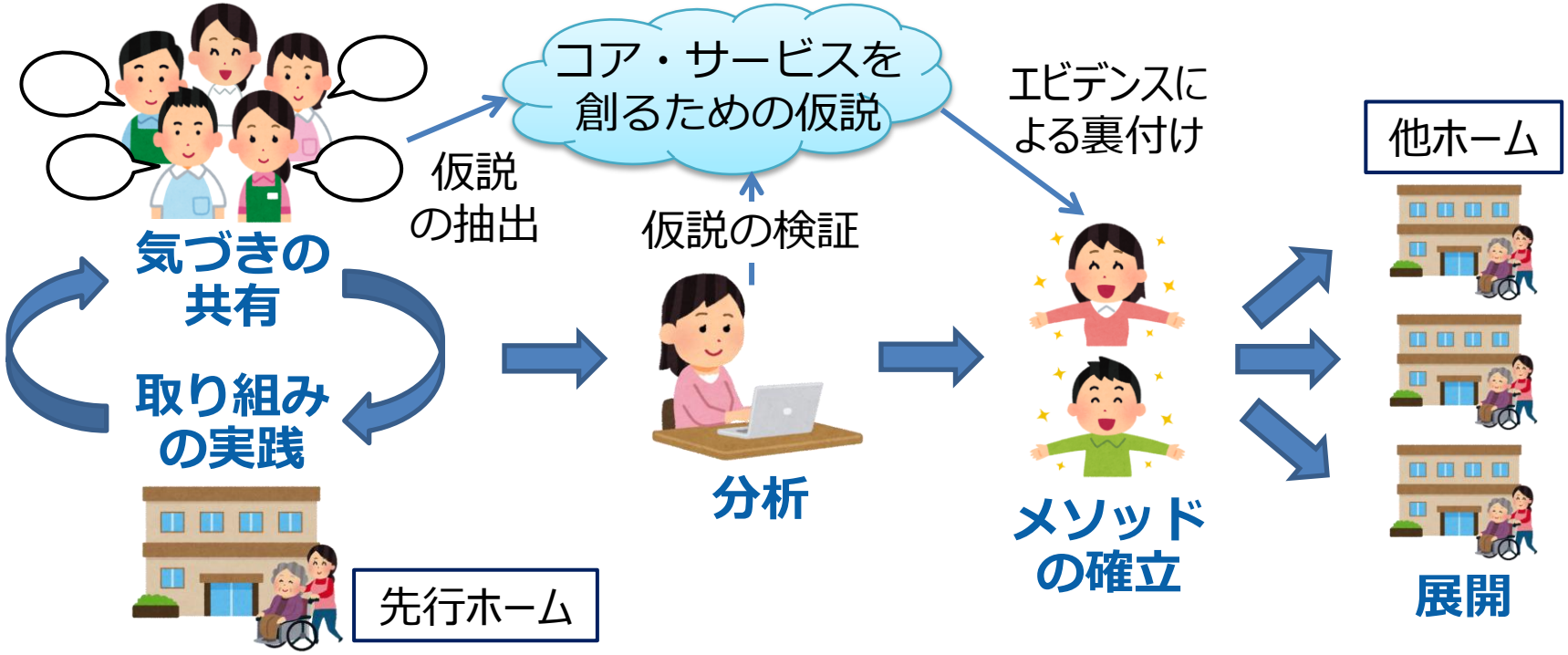
有料老人ホームにおける認知症ケアメソッド構築に向けた現状把握

福田亮子、小森由美子、林奈実、蓮見昭洋、奥村太作、
伊藤耕二、松本知恵、太田慎也、安達覚史、滝山真也
（株式会社ベネッセスタイルケア）

目的

認知症ケアプロジェクト

認知症の方に対する支援の見直しを通し、
事業理念を実現するコア・サービスを創る



調査目的

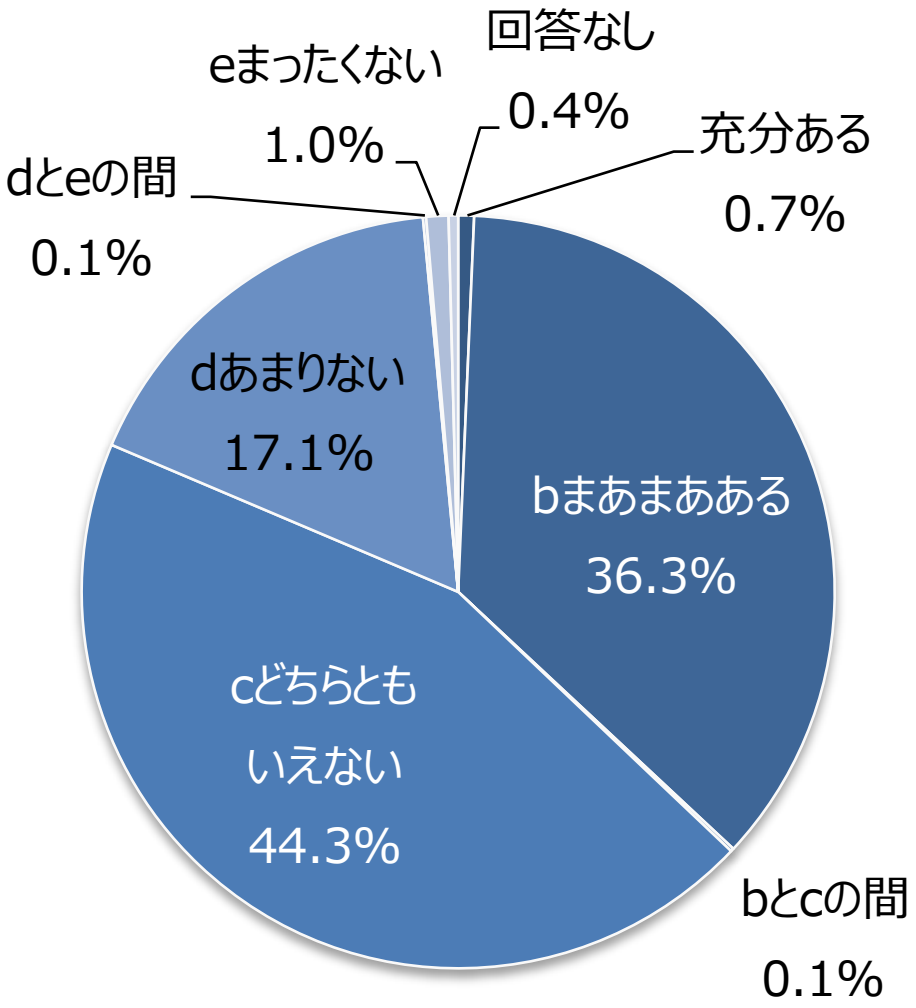
認知症を持つ人に対するよりよいケアの「メソッド」構築に
先立ち、介護現場の認知症ケアについての意識を把握

方法

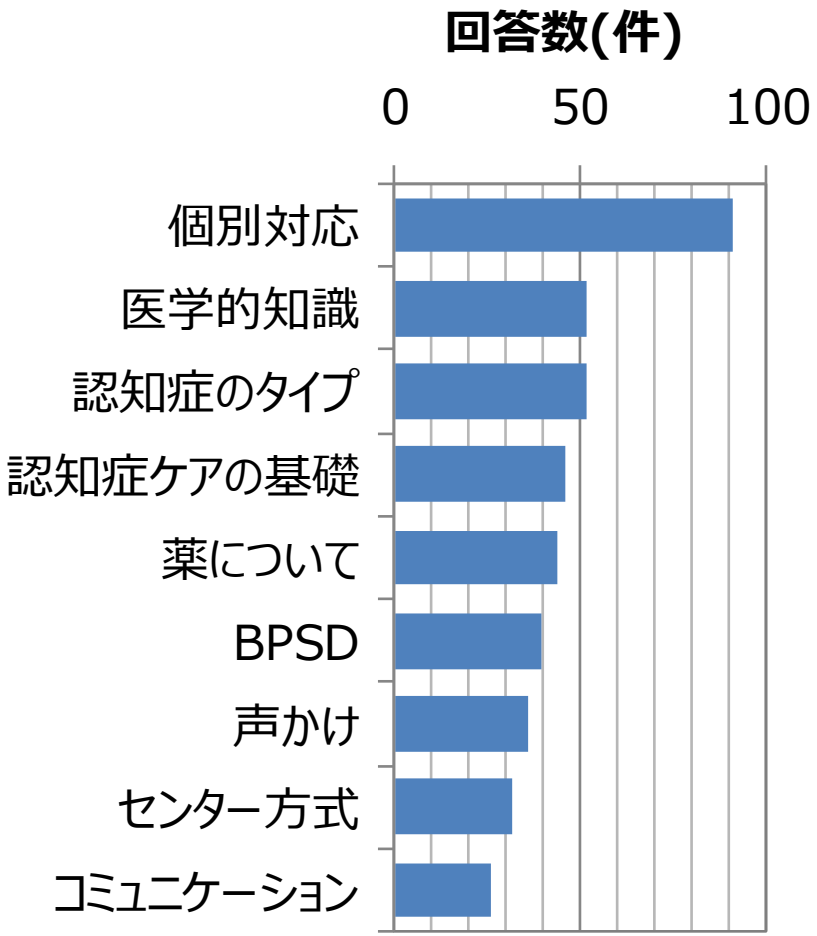
- 50の有料老人ホームの職員に対してアンケート調査を実施、736名から回答を得た
- 倫理的配慮
  - アンケートは無記名とした
  - 回答は自由意思に基づくこと、回答用紙の提出をもって協力への同意を得たものとする旨を事前に説明した
  - 調査にあたり担当事業本部長の許可を得た

結果① 認知症ケアのスキル

あなた自身の認知症ケアのスキルのレベルはどのくらいだと思いますか？

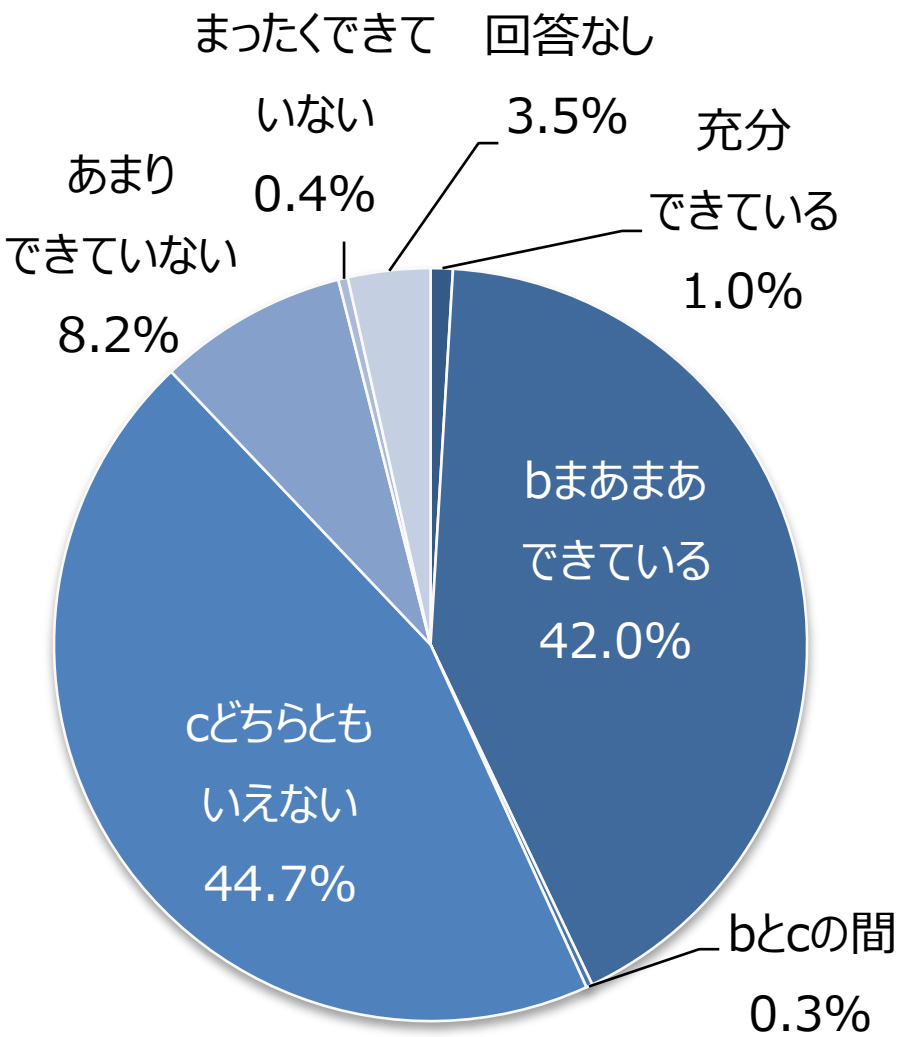


足りないと思ったり、学びたいと思う知識やスキルを教えてください。

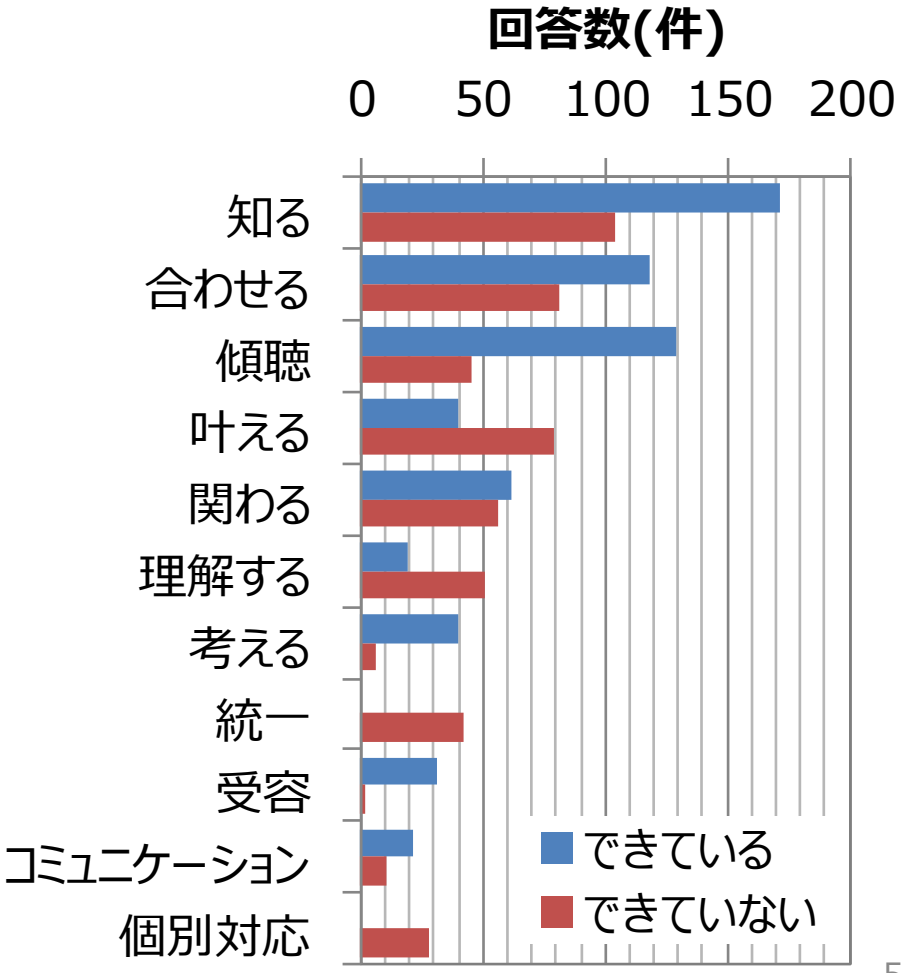


結果② その人らしさへの寄りそい

あなたは「その人らしさに、深く寄りそう」をどのくらい実践できていると思いますか？

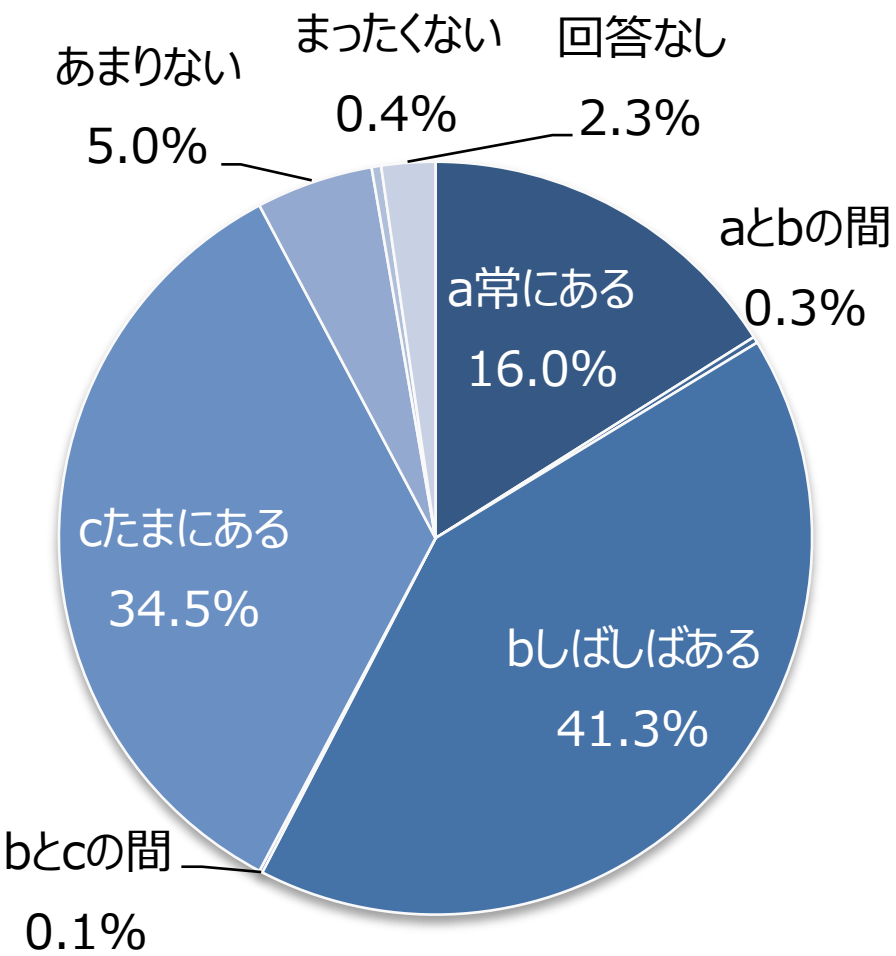


あなた自身が「できていること」、「できていないこと」両方教えてください。

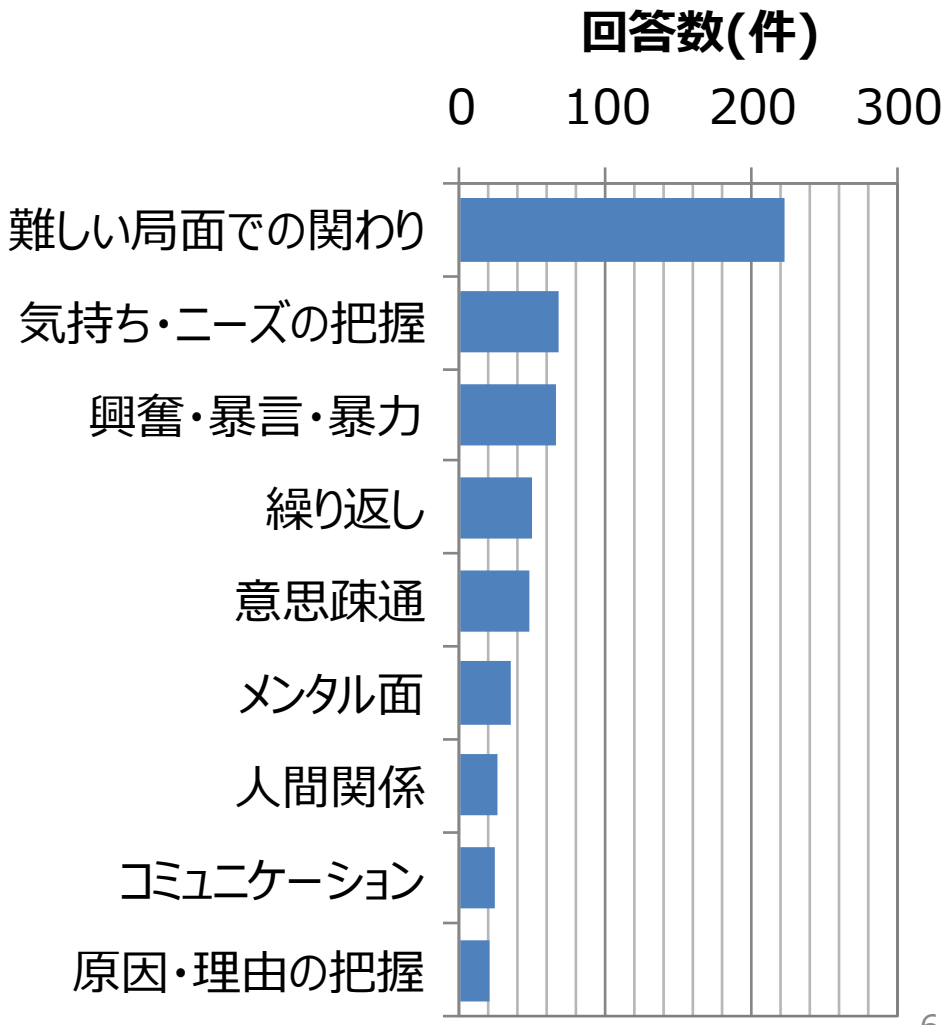


結果③ 認知症の人との関わりで困ること

認知症の人との関わりで、困っていることや悩むことがありますか？



困っていること、悩むことを教えてください。



考察　認知症ケアの現状

コミュニ
ケーション
声かけ
センター
方式

知識・スキルの習得

ある程度できている

まだできていない部分が多い

傾聴
受容
知る

考える

関わる

理解する

(介護者間の)
叶える
個別対応
統一

知識・スキルの習得

認知症のタイプ
認知症ケアの基礎
BPSD

医学的知識
薬の知識

知識・スキル・経験の共有

おわりに

今後実施すべき事項

- 研修や自主勉強会等による知識・スキルの習得
- 習得した知識・スキルをもとにした実践
- チームでの実践プロセスと結果の振り返り（共有）

期待される効果

- 本人の理解の促進
- 本人への関わりの向上（個別対応の実現、要望の実現、介護者間の関わりの統一等）

目指すところ

- 本人のQOL、ADLの向上
- 介護者のやりがい、満足度の向上